

# 「教職実践演習」の成果と課題

唐川 千秋

倉敷芸術科学大学生命科学部

(2016 年 10 月 1 日 受理)

## 1 「教職実践演習」導入の経緯

文部科学省は 21 世紀を「知識基盤社会」と位置づけ（文部科学省、2005a）、これに対応できる各種教育施策を行ってきた。知識基盤社会とは、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」とであると定義され、情報化、グローバル化が急速に拡大するなかで、優れた人材の養成と科学技術の振興を担う高等教育の責務と重要性が指摘されているが、これは同時に、高等教育の前提となる初等中等教育の質の向上を求めることにつながる。文部科学省が現在検討している初等中等教育に係る学習指導要領の改訂、初等中等教育を担う教員の養成と採用・研修制度の見直しは当然の帰結といえる。

中央教育審議会が 2006（平成 18）年 7 月に出した答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」で、「学部卒業段階で、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせ、学校現場に送り出す」ための具体的方策として、「教職に関する科目」のなかに教職実践演習を新たに必修科目として設けることが示された（文部科学省、2006）。これを受けて、2008（平成 20）年 11 月に教育職員免許法施行規則が改正され、2010（平成 22）年度以降に教職課程を履修する入学生は、教育実習を終えた 4 年次後期（短期大学の場合は 2 年次後期）に教職実践演習を受講することが義務づけられた。あわせて、入学から卒業までに教職課程を履修することで修得した知識・技能を指導教員と履修学生の双方が確認し、次ステップへの学習活動へとつなげていくための資料の 1 つとして、履修カルテを作成・活用することが求められている。

## 2 「教職実践演習」に含める 4 つの事項

教員として必要な資質能力にはさまざまな側面がある。1997（平成 9 年）7 月の教育職員養成審議会・第 1 次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」では、①「教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力等」である「いつの時代も教員に求められる資質能力」、②子どもたちがこれから先の社会で求められていく知識・情報・技術が大きく変動していくことが予測されるなか、「生きる力」を育む教育を授けることができるように、（ア）地球的視野に立って行動

するための資質能力、(イ) 変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力、(ウ) 教員の職務から必然的に求められる資質能力の3つを、「今後特に教員に求められる具体的資質能力」として例示している（文部科学省、1997）。このうち（ウ）は上述の「いつの時代も教員に求められる資質能力」に相当する。

また、2005（平成17）年10月の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、①教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などをもち、常に学びつづける向上心をもつ「教職に対する強い情熱」、②児童・生徒を的確に理解し、児童・生徒個人を指導するとともに学級集団を指導する力、児童・生徒の資質・能力を十分に伸ばさせる学習指導力など「教育の専門家としての確かな力量」、③豊かな人間性や社会性、対人関係能力などの「総合的な人間力」が、義務教育の質の向上と、教員に対する揺るぎない信頼の確立に必要であるとしている（文部科学省、2005b）。

これらの答申で共通して繰り返し挙げられているのは、「いつの時代も教員に求められる資質能力」であり、2006年の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」でも引き継がれている。したがって、学部卒業段階で、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児・児童・生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項の4つが身につけていることが求められていることを、教職課程を履修している学生が明確に意識し、それらについて省察を行うことで、自分にとっての課題を自覚して、新任教員としてスタートするには不足している知識や技能等を補うことが教職実践演習のねらいとなる。

### 3 本学での「教職実践演習」への取り組み

2010年に教職実践演習を新規開講するにあたって、①これまでの教職課程の履修履歴を踏まえて、教員として必要な知識技能を修得したことを確認する、②教員としての使命感や責任感、教育的愛情等をもって、学級や教科を担当しつつ、学習指導、生徒指導等の職務を実践できるようになる、の2点を到達目標として、シラバスを作成している。

講義の運営は専任教員3名全員で行い、30名前後の履修生がグループワーク、ロールプレイングを中心として学修を進める形態をとっている。

教職実践演習で省察を行うための材料は、教育実習録と指導案、教育実習振り返りシート、履修カルテとなる。

教育実習振り返りシートは、「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（文部科学省、2006）の別添1の資料に示されている到達目標及び目標到達の確認指標例にもとづいて、上記4つの事項について、それぞれA4用紙1枚に到達目標と目標到達の確認指標例に照らしながら教育実習の成果と今後の課題を記述するもので、教育実習終了直後の記憶が鮮明な時期に記入するように指示している。

履修カルテは当初は冊子形式であったが、記載内容の書き直しをすると記入枠からはみ

出したり、汚くなったりする、場合によっては紛失して曖昧な記憶をもとに一から記入し直すなどといった使いづらさの理由から、2013年度からEXCELファイルの形式に変更した。

記入すべきワークシートは、①教育職員免許状の取得に必要な科目の単位修得状況、②自己評価、③到達目標チェックリストで構成される。①の単位修得状況のワークシートには、該当科目のWEBシラバスを利用して到達目標を記入したうえで、それに照らして「学んだこと・さらに努力すべきこと」を振り返るようにしている。また、介護等体験とボランティア活動等の活動内容と気づきも記録するようになっている。②の自己評価シートは、(ア)自分にとっての「教職」の位置づけ、(イ)必要な資質能力についての自己評価(5段階尺度)とレーダーチャート、(ウ)学期ごとの目標設定と振り返り、(エ)教員を目指すうえで課題と考えていること、から成る(表1-表4)。③のチェックリストは、初めて教職実践演習を開講するにあたって、4つの到達目標についての教育成果を教員と履修生が共有できる指標にもとづいて、学生の考えた課題への取り組み案を討議・評価するためのものである。2013年12月12日に京都大学で開催されたE. FORUM 教育研究セミナー「「教職の高度化」をどう構想するか」で配布された、京都大学教職課程が開発した自己評価用チェックリストと自己評価用ループリックをそのまま用いて、2013年度の履修学生に「何が問われてるかがわかるか」を質問した。各到達レベルで求められる能力の違いに関する記述の差異(たとえば、「観察」と「適切に観察」)は理解できるが、「Aができ、Bができ、Cができる」といったダブルバレルの設問形式であるため、当てはまるとも当てはまらないともいえるという意見が多かった。そこで、2014年度からは文部科学省の示した到達目標及び目標到達の確認指標例と、京都大学教職課程の自己評価用ループリックを参考にして、1つの設問では1つのことだけを問う形式のチェックリストを作成した。

#### 4 教育実習を振り返っての課題

教育実習終了後に教育実習振り返りシートを作成することで、教職実践演習で自らが取り組む必要のある課題をあらかじめ明確に言語化することを目的としている。

以下に、履修生が振り返りシートの今後の課題の欄に記した内容を挙げる。

##### ① 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項について

- ・私自身が学校の規律を守ることや集団だからこそ規則を守っていかなければならないということの重要性を理解してはいるのだが、それを柔らかに言葉で生徒に説明することができず、注意すべきことに対して理由をうまく説明することができなかった。
- ・公平さや誠実さに関して、教師としての立場をわきまえ、子どもに教えるばかりでなく自分も学ぶという姿勢を忘れず、今後の課題に取り組みたい。

- ・どの生徒に対しても誠実に公平に接するためには、偏った生徒たちだけに話しかけにいくのではなく、いろいろな生徒に対して自らが進んで積極的にコミュニケーションをとっていく必要があった。
  - ・生徒は不平等にすごく敏感なので、細心の注意を払うべきだと思った。
  - ・自分が教員であることを自覚したうえで生徒と本音で話をしたり、時には厳しく指導できることが望ましく、そのためには何よりも教員とはどんな仕事で、何のために存在する職業であるのかを認識し、教員の立場を理解したうえで生徒と接し、教育者として生徒のことを考えた指導をし、そのなかで生徒に教員としての自分を理解してもらったうえで生活や勉強面などについて話ができるように目指したいと思った。
  - ・教育の使命や職務についてはまだ曖昧なので、これからきちんと理解し、積極的に職責を果たせるようにしたいです。
- ② 社会性や対人関係能力に関する事項について
- ・自分自身がふだんは生徒という立場であり、高校生とも年が近かったため、あまり教師としての接し方や言葉遣いができなかったように思うため、今後は教師という自覚をしっかりともったうえで生徒と接する必要があるように感じ、ひとつひとつの言葉に責任をもつことも大切であるとわかりました。
  - ・教員の先生方とのコミュニケーションについて、クラスの担当教員と教科の担当教員の先生方とは毎日接する機会があったため、よくコミュニケーションをとることができましたが、その他の先生方とはあまり積極的に関わることはできませんでした。
  - ・オープンスクールの際に中学生や保護者の方との関りがあったのだが、大きな声で挨拶することしかできていなかった。今後の課題には、保護者との関わり、コミュニケーションをとりたいと考えている。
  - ・今回は保護者の方や地域の方と関わる機会はなかったものの、教員をしていれば必ず関わっていかなければならないことであり、一人一人の生徒の保護者の人柄や家庭の事情を把握したり、学校側だけでなく、保護者や地域の人々と連携して生徒の教育や安全の保障をしていく必要がある。
- ③ 生徒理解や学級経営等に関する事項について
- ・生徒たち全員に1日1回は話しかけるように努め実行しましたが、健康状態や精神的な状態まで把握する余裕がなく、ただ単に話しかけるだけになっていたため、今後の課題として、もっと観察力を身につけ、少しの変化にも気づくことができるようになりたい。そして、何か迷っていることや悩んでいることがあれば相談に乗ってあげられるような信頼関係を築けるように努めたい。
  - ・現代の中高生がどんな悩みを抱えているのかや、その悩み・問題に対する解決策、接

し方などを自ら進んで事前に学んでおくべきである。生徒からの SOS には人一倍敏感にならなければならない。

- ・クラス担任としてクラスを運営する場合は、どのようなことを指導したいのか、このクラスをどうしたいのか、生徒たちに何を伝えたいのかを常に考え、まとまりのある考えをもったうえで指導ができるようにしたいです。
- ・子どもの特性や心身の状況を把握し、学級という集団を意識し、生徒の居場所となるような学級活動をすることが課題である。

#### ④ 教科等の指導力に関する事項について

- ・授業中に行う発問で、自分の発問の仕方が悪かったりすると生徒に伝わらなかったりして、つまづいてしまったりしたので、もっと発問の中身を考える必要があった。
- ・このことは必ず理解させたいという達成目標をできるだけ細かく設定し、それを目標に授業を進められるようになりたい。
- ・LHR の授業で、知識を伝えただけで、知識を得てそこから何を考えてほしいのかということをまとめきれていなかった。やはり、何を伝えたいかということを根本に置き授業を組んでいかなければ、テーマから入ったらそれにとらわれて生徒自身に考えてほしいことがあやふやになってしまう。
- ・今後しっかり考えていきたいのは、生徒の成長のためになる「自由度」とはどのくらいのものなのかということである。自由度が低いと、生徒が言われたことを言われたようにやるだけの広がりがない授業になってしまう。

教職実践演習の 4 つの到達目標のうち、教育実習で多くの時間を割いて指導案を作成し、授業で生徒の生の反応に戸惑ったり、うまく授業ができたことへの満足感を得る機会の多い教科等の指導に関しては、振り返りの内容が具体的で、改善への方向性が見えやすい記述となっている。また、生徒理解の重要性は十分に認識しており、信頼関係にもとづいて生徒と深く関わっていくことを皆同様に指摘している。一方、2 週間ないし 3 週間の教育実習期間では教員としての生徒との適切な距離感がつかみにくいことがわかる。

使命感や責任感等に関しては、具体的に理解でき実行しやすい「誠実、公平」については今後の課題を明確にあげることができているが、「使命感」については 2 年次の「教職論」、3 年次の「教育実習 I（事前・事後指導）」で討議やレポート作成をしているものの、抽象的な記述にとどまっている。

学校の教育目標に向けて学校全体や学年団で協力して職務を遂行する、学校と家庭、地域との連携・協働によって共に子どもの成長を支えていく、学級経営の 3 点に関しては、教育実習のなかで体験する機会がほとんどないため、「必要だと思う」といった観念的な記述となっている。

## 5 履修カルテから見てくる学修成果

教職課程を4年間履修するなかで学生が自己の成長過程を記録し、課題を見つけ、次のステップにつなげていくことが履修カルテ作成の目的である。表1－表4から読み取ることができるよう、教職課程を履修すること自体が目標となっている1・2年次に比べて、3年次前期の「教育実習Ⅰ（事前・事後指導）」を終えた頃から、教育現場へ出ていくための指導案作成、模擬授業へと目標が推移している。さらに、4年次後期の「教職実践演習」を控える時期になると、それまでなかった「4年間の振り返り」「総まとめ」「今後の課題」といった用語が出てきて、「教職実践演習」の位置づけを正しく理解していることがわかる。

表2の必要な資質能力についての自己評価では、一部に高学年になると評価の下がる項目が出てくることがあるが、これについては自己の客観視が進むことや、教育現場で求められていることに対する理解が深化して到達目標を上げることによると考えられる。

表1 「あなたにとっての「教職」とは？」の記載例

はじめは、将来自分が就職する選択肢を多くするために教職課程を履修し始めたが、実際に教職課程を履修し、模擬授業を行い、教育実習を終えると、教師という職業は1つの授業を行うだけでもその授業の何十倍という時間をかけ指導案を作成する必要があるし、日々のHRでの生徒たちをまとめるリーダーとして伝達事項や指導なども行うし、年間行事や、生徒たち1人1人の進路、悩みなどを一緒に考えたりなどと、教師というものは単に授業を行うだけではない、とても大変なものではあるのだが、生徒たちのために尽くし、一方で元気で素直な生徒たちに支えられ、大変さゆえにとっても充実感や達成感を得られるものであると感じた。

表2 「必要な資質能力についての自己評価」の項目・指標と記載例

必要な資質能力の指標		自己評価			
項 目	指 標	1年生	2年生	3年生	4年生
教育に対する情熱・使命感	教育に対する情熱・使命感を高めるための努力をしている。	3	3	3	5
教育の重要性の認識	教育の重要性と社会的意義・責任を深く認識している。	2	4	4	4
教科教育に関する専門的知識	取得する免許に関する専門的知識を十分に有している。	4	4	4	4
授業実施に関する力量	模擬授業やゼミでのプレゼンテーションなどを通じて授業実践に関する力量を高めようとしている。	1	4	4	4
生徒とともに歩む姿勢	生徒を一人の人間として尊敬し、ともに成長する存在となることを目指している。	2	3	3	4



必要な資質能力の指標		自己評価			
項 目	指 標	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生
生徒とのかかわりの経験	学校ボランティア等を通じて、積極的に生徒と触れ合う機会を持つとしている。	4	2	4	4
幅広い教養	一般常識を踏まえ、社会人として必要となる幅広い教養を身につけている。	4	2	3	3
社会性と協調性を兼ね備えた人間性	他者と積極的に交流し、協同して取り組むことができる豊かな人間性を身に付けている。	4	4	4	5

表 3-1 「学期ごとの目標設定と振り返り」の記載例（A さん）

学期	学期当初目標	達成度	振り返り
1 年生 前期	教職を続ける。途中でやめない。 きちんと単位を取る。	100%	教職課程で必要な科目は、全て A だった。 これからも大変だろうけれど、教職の講義 に出て続けようと思う。
1 年生 後期	授業内容をきちんと理解する上で 単位を取る。ボランティアティー チャーへの参加をする。	70%	ボランティアティーチャーや、インターン シップなどの参加を積極的に行った。教 職に必要な講義も全て A を取れたが、い まいち理解出来ていない科目もあるため、 しっかりと復習して理解したい。
2 年生 前期	1 つ 1 つの講義をきちんと復習し、 理解して次の講義に臨む。また、 積極的にボランティア活動に参加 したい。	40%	日々の講義の復習があまりできておらず、 そのため授業に十分な準備をして取り組め なかったように思う。また、ボランティア 活動への参加もしていなかった。
2 年生 後期	1 つ 1 つの講義を大切にし、日々 の各講義に対する復習をし、次の 講義に臨む。	50%	日々の復習は講義によってバラつきがあっ たため、以降ではどの講義においてもまん べんなく予習・復習ができるよう組み たい。
3 年生 前期	各講義に対して予習・復習をし、 幅広い知識・理解を深める。また、 理科学目における物化生地の自分 の学びが足りない部分を補い、教 育実習にむけての準備をする。	40%	全ての講義に対して 100% の予習・復習を するには時間が足りなかったため、100% でなくとも重要点をしっかりと押さえた復 習ができるようにしたい。理科学目の学び についても、まだ知識・理解を深めていく 必要がある。
3 年生 後期	模擬授業を通して授業スキルを身 に付け、また理科学目における知 識・理解の学びを深め、教育実習 に向けての準備をする。	60%	模擬授業を繰り返すことで、板書や授業展 開の仕方などのスキルを以前よりも高める ことができた。しかし、教育実習に行くに はまだ不十分であるため、さらにスキルを 高める必要がある。

学期	学期当初目標	達成度	振り返り
4年生 前期	模擬授業を繰り返し、授業展開や発問などの授業スキルを高める。	80%	教育実習において、授業を行う前には、できるだけわかりやすく生徒たちが学習できるような指導案にするため、目いっぱい時間を費やし指導案を作成、授業のイメージ、模擬授業を行うことで、実際の授業に挑むことができた。
4年生 後期	今までの知識や実践で得た内容などを改めて整理・統括し、教師としてあるべき姿を考える。	80%	1年前期の教育課程を履修し始めたころと、教育課程を修了した現在とでは、教師としてあるべき姿、教師とはどのようなものかなど、教育に対して新たな考えを得ることができた。

表 3-2 「学期ごとの目標設定と振り返り」の記載例（Bさん）

学期	学期当初目標	達成度	振り返り
1年生 前期	専門科目の基礎となる授業もあるため、全ての単位を取得できるようにする。	90%	単位は全て取得できたが、得た知識を今後にしかりと生かしていく。
1年生 後期	再履修とならないように確実に単位を全て取得し、理解も深め2年につなげる。	90%	単位はとりこぼすことなく、取得できた。専門分野の基礎固めがよくできたと思うが、もう一度よく復習しておく。
2年生 前期	専門分野の知識を深め、教職についてもよく学び、知識をつける。	90%	単位を取りこぼすこともなく、専門分野の知識も深めることができた。教職の授業についても同様に学べた。
2年生 後期	専門分野の知識をより広げ、教職科目についてもより理解を深める。	90%	専門分野も教職科目も内容が深く具体的になってきたが、基礎を復習しながらしっかりと学ぶことができた。
3年生 前期	教職科目については、教育実習に向けて指導案などの準備を進める。専門分野に関しても、より詳しい内容を理解する。	90%	何度か模擬授業を行い、指導案の書き方も授業の進め方も学ぶことができた。専門分野の知識を深めることができた。
3年生 後期	4年次の教育実習に向け、さらに指導案を作成する力をつける。また、専門分野では資格試験の取得と、より深い知識の修得に努める。	90%	指導案作成や模擬授業の進行方法など、より理解を深めることができた。また資格も取得できたため、知識をより深めつつ4年の教育実習と卒業論文につなげる。
4年生 前期	教育実習にむけて準備を進め、実際の教育実習に臨む。また、卒業論文にむけての知識も深める。	90%	実際に教育実習を経験し、机上の勉強だけでは得られないさまざまなことを得ることができた。また、生徒たちと実際に接する中で、教師としての立場や責任なども体験することができ、いろいろと考えることができた。



学期	学期当初目標	達成度	振り返り
4 年生 後期	教育実習を終えての振り返りを行い、今後に活かせるように今後の課題などについてよく考える。また、卒業論文についても研究を進め、論文を完成させる。	90%	教育実習で得た経験などの振り返りを行うことで、自分に不足していることを知ることができ、今度の課題として明らかにすることができた。また、卒業論文に関しては、全ての実験を終え、その結果から考察し、さまざまな考え方を身につけることができた。

表 4 「教員を目指す上で課題と考えていること」の記載例（A さん）

1 年生	今までの教育の歴史や重要人物たちの教育に対する概念を学ぶこと。その上で適切なものを少しずつ学んでいくこと。
2 年生	理科の科目である物化生地を幅広く理解し、説明できるようにすること。
3 年生	なるべく多くの生徒が理解でき、印象に残るような授業を展開することで、生徒の将来に向けての進路の道を広げること。
4 年生	生徒との関わりを大切にし、自らが積極的にコミュニケーションを図ることで、生徒と教師との間の信頼関係を築くこと。また、授業を行う上では生徒観を十分に把握し、クラスごとに適した授業を展開すること。

## 6 教職実践演習を終えての課題

教職実践演習の科目についての振り返りで、ある学生は「教育実習を終えて、授業を通して改めて教育の在り方や教師としての意義を考えることができた。例えば、教育実習中に実際に行った授業において、自分が達成できなかったような課題を挙げて振り返り、その課題を達成するための解決策を明確にし、グループで再び模擬授業を行った。教員としての使命感や責任感…などにおいても、同じようにグループでディスカッションを行い、教育実習での内容を振り返り、今後の課題と解決策について明確にすることができた。」と記している。教職実践演習の目的が十分に達成されたように見えるが、2014 年度から導入したチェックリストを分析すると、課題が明らかになってくる。

2014 年度（24 名）、2015 年度（27 名）の自己評価をプールした結果、履修生が実体験にもとづいた具体的な課題と改善策を見つけやすい授業等の指導力に関して、「単一の単元を教えるのに必要な知識・技能」であれば 90%がチェックできるが、「2 つ以上の単元」になると 53%へと大きく減少する。これは、学習指導案の作成にあたって、学習指導要領や教師用指導書を参考にしながら単元目標や単元間の関連性を記すことはできるが、中学校ないし高等学校 3 年間の教科内容全般を見通した深い理解が不十分なことによると考えられる。また、教科指導は学校教育目標を具現化する核となるもので、意図的、計画的、組織的な年間指導計画にもとづいた授業構想が必要となるが（西田、2014）、教職実

実践演習のなかで扱いされていない。

「生徒の特性や心身の状況を把握したうえでの学級経営の立案」は49%で、福岡市教育センターが作成した「学級経営を充実させるために」などを資料として講義とグループワークを行っているが、生徒の実情に対する理解が不十分なことからマニュアルに沿った表面的な案にとどまっている。日々の関わりから学校行事までを有機的に結びつけた学級経営計画を策定して同僚の教師や保護者に理解と協力を求めることが必要となるが（小松、2014）、これもまた教職実践演習のなかで扱いされていない。年間指導計画と学級経営計画については、各県の教育センター等で公開されている資料を参考に講義、グループワークを展開していくことから対応していきたい。

また、教育実習中で経験することはほとんどない「保護者や地域の関係者の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携・協力しながら課題に対処することの重要性を理解」も51%と低い。「チームとしての学校のあり方」（文部科学省、2015）に関する理解の深化を進める必要がある。

#### 引用文献

- 小松伸之 学級経営のあり方について 原田恵理子，森山賢一（編著） 自己成長を目指す教職実践演習テキスト 北樹出版，2014. 74-80 頁.
- 文部科学省 教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第1次答申）」1997.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_shokuin\\_index/toushin/1315369.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315369.htm)
- 文部科学省 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」2005a.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm)
- 文部科学省 中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」2005b.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601/all.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601/all.pdf)
- 文部科学省 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」2006.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm)
- 文部科学省 中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」2015.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657\\_00.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf)
- 西田正男 学習指導案作成の重要性とその意義 原田恵理子，森山賢一（編著） 自己成長を目指す教職実践演習テキスト 北樹出版，2014. 26-30 頁.

## Effects and problems of “practical seminar for the teaching” in teacher education

Chiaki KARAKAWA

*College of Life Science*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received October 1, 2016)

In 2010, “practical seminar for the teaching” was newly introduced into teacher training programs. The targets of the seminar are as follows: (i) vocation and responsibility, (ii) sociability and interpersonal relationship skills, (iii) student counseling and classroom management, and (iv) guidance in school courses. The students registering the courses are required to do reflection about learning outcomes based on course history. Especially, they realize the insufficient abilities and skills as a teacher through various experiences during teaching practice and enlarge and make additions to their shortcomings. The free descriptive documents of reflection seem to be evidence that “practical seminar for the teaching” enhance students’ abilities or resources. However, a critical analysis reveals that about half of students have difficulty in an annual plan of both classroom management and subject teaching, which they rarely experience during teaching practice.